

昭和初期の北陸地方キリスト教幼稚園教育(1)

—— 十四番幼稚園『幼稚園記録』より ——

山 森 泉

1. はじめに
2. 行事プログラムからわかる保育の姿
3. キリスト教七幼稚園合同行事
4. 両親教育——母の会と父の会
5. 終わりに

1. はじめに

十四番幼稚園（現在の清泉幼稚園）は、金沢市尻垂坂3丁目14番地に建てられたカナダ婦人宣教師の宿舎に於いて大正15年（1926）に創設された幼稚園である。創立者はカナダ合同教会婦人伝道会社（『幼稚園記録』によれば、カナダ合同教会婦人伝道協会）、園長はミス・テイト、社会事業の一端として設立された。宿舎が通称十四番館と呼ばれたことから昭和26年（1951）に清泉幼稚園となるまで、「十四番幼稚園」の名で幼児教育を行ってきた。正式認可は昭和9年。当時カナダミッションによって作られた幼稚園は創立順に、川上幼稚園、馬場幼稚園、白銀幼稚園、野町幼稚園（現在の桜木幼稚園）、広坂幼稚園（現在の長町幼稚園）があり、他のキリスト教幼稚園に比べると歴史は浅いが、婦人宣教師の伝道活動の中心にある幼稚園としての役割を担ってきた。^(註1)そのため、他の幼稚園にはない婦人宣教師たちに関する資料も残されており、これらの資料をどのような形で残すべきかを検討しつつ資料整理に当たっている最中である。^(註2)

カナダメソジストの伝道については『日本メソジスト教会年會記録』や『加奈陀メソジスト日本伝道概史』などをたどることで全国の動向を知ることができるし、金沢における伝道に限ってみれば、D. R. マッケンジーの業績に関連して述べられたものもある。^(註3)

北陸の地における幼稚園教育の歴史、初期の婦人宣教師の活躍、伝道については、『日本の幼児保育につくした宣教師』上巻^(註4)や、「英和幼稚園を創った婦人宣教師」^(註5)などで述べられている。また、北陸地方の幼稚園教育の姿を埋もれさせないために、聞き書きという形で稿をまとめたものもある。^(註6)

本研究ではその間をつなぐものとなるよう、十四番館に残る『幼稚園記録』を中心としてその周辺の資料を参照しながら、当時の姿を掘り起こしていくことを試みた。『幼稚園記録』は「記録」という名前ではあるが、単なる事項の羅列ではなく、主要な行事のプログラムなども記録されているほか、記録を書いた主任保母田多野貞子（昭和4年東洋英和女学校師範科卒、同7年から主任、同

山 森 泉

16年から55年まで園長)の思いもところどころに見ることができる。またその記録と資料とをつき合わせるにより、当時の保育で用いられていた歌やリズムなどを一部再現することが可能となる。

今回対象とする時期は記録が残されている範囲に限定し、昭和7年から昭和14年3月までとする。

2. 行事プログラムからわかる保育の姿

キリスト教主義の幼稚園では、「宗教教育を保育全体の流れの中で考えよう」としており、年間行事では感謝祭とクリスマスが特に強調されている。(註7)年によってプログラム内容が書かれていない行事もあるが、『幼稚園記録』に記載されている感謝祭・クリスマス・保育修了証書授与式のプログラムは、いずれも二部構成でほぼ内容順が決まっています、それぞれの行事にふさわしい歌や遊戯、対話、言葉が用いられている。そこで歌われた歌やリズムは実際どのようなものであったのだろうか。現在まで歌い継がれているものもあれば、当時に廃れてしまったものもあるが、残されている楽譜類からかなり再現することができる。(註8)本稿で扱う昭和14年以前に出版された楽譜で出版年が分かるものは、全部で30点ある。行事の記録のうち、本稿ではまず昭和7年度の記録を取り上げる。昭和7年は感謝祭、クリスマス、卒業証書授与式の折のプログラム内容が書かれている。(表1 参照)

表1 昭和7年度の行事プログラム

- ※1 番号はプログラム順を示す。○数字は楽譜が確認できたものである。
- ※2 演目の種類として「うた」と書いてあるものは、「歌」と表記し直した。
- ※3 曲名の後のアルファベットは、現在残っている十四番館資料で確認できたものを示す。
- ※4 漢字表記、送り仮名、仮名遣いは『幼稚園記録』のままである。(以下の記載も同様である。)
- ※5 一組は2年在園して翌年3月卒業の組であり、二組は新入園で1年保育卒業の組である。

行事名	構成	プログラム内容
感謝祭 11月1日	一部	1 奏楽 ② お祈(歌 光や雨) I-2 ③ 歌 秋はうれしい I 4 言葉(百姓) ⑤ ダリヤのうた(三組) I 6 言葉(大根) 7 言葉(人参)(リンゴ) 各組より一人の代表に言せる ⑧ リンゴのうた F 9 お話(田多野) 10 虫のうた(二組) ⑪ 大麦、小麦(一同) B
	二部	① リトミックおじぎ(三組) J ② 往来(二組) J・K ③ ひよこ(一、二組女兒) K 4 体操 5 名当遊び ⑥ どなたが私と一緒に遊ぶ E ⑦ 笹の舟(一同) D
クリスマス 12月20日	一部	1 奏楽 2 お祈 ③ 歌 朝の星 C・I 4 聖句暗誦 ⑤ 歌 ふくろふ I 6 神のみこ ⑦ お星さ満 B
	二部	1 対話 クリスマス 2 大雪 ③ まりなげ N 4 兔と亀 ⑤ おさる K ⑥ 小人のダンス ⑦ 風車 C・K ⑧ 楽隊 J ⑨ お正月のうた A・C・I 10 贈物
証書授与式 3月18日	一部	1 奏楽 2 お祈 3 君が代 4 歌 梅の花 5 聖句暗誦 ⑥ 歌 ひばり B 7 お話 ⑧ 歌 春を呼ばふよ B ⑨ 歌 やさしい花 L 10 保育証書授与 11 訓辞(園長) 12 答辞 13 答歌 14 送辞 15 送歌
	二部	1 春の空(対話) ② まゝごと(在園児) ③ かわいゝ子(同) J ④ 蝶々の町(終了女園児) F・N ⑤ 水兵(同男児) J 6 へゝのゝもへ字(ママ)(終了男児) ⑦ チューリップ兵隊(同女兒) 8 幼稚園バンド ⑨ 私はよい子(一同) G 10 お別れ(一同) 11 記念品授与

確認資料名

- A : 『Kindergarten Songs and Games 幼稚園の遊戯歌』(大正10年刊行)
- B : 『律動遊戯』第壹巻 土川五郎(大正6年発行 大正15年21版)
- C : 『情動的 表情遊戯』第壹集 土川五郎(大正13年)「秦みさを」の名前がある。
- D : 『増補 遊戯の歌と曲』土川五郎振 二友社印刷
- E : 『大中寅二 子供の歌曲集』(昭和4年発行)
- F : 『遊戯の歌と曲』土川五郎振(昭和6年度第一巻)信東社印行
- G : 『コドモノクニ』昭和7年4月号 この月の付録は「蝶々の町」の楽譜と振り付けである。
- H : 『幼稚園の歌』秋の部、冬の部、雑の部 東洋英和女学校師範科1学年田多野貞子の記名がある。女学校で使用したテキストか。曲名を記した目次もあるが、90曲の楽譜も全て手書きである。よく知られた曲も含めてほとんどの曲に作詞・作曲者名の記載がない。
- I-1 : 『芽のおと』(発行社、発行年不明) 白紙の五線譜の用紙がついており、手書きの楽譜(写したもの)がいくつかある。破損がひどく、紛失ページもある。田多野貞子の名前が記されているほか、田多野の印も押してある。他に、『空のおと』『土のおと』の本も残されている。
- I-2 : 『泉のおと』(発行社、発行年不明) 上記の『芽のおと』と同じ体裁で、宗教の部9曲、挨拶の部5曲、遊戯の部62曲が含まれている。
- J : 手書き「MUSIC BOOK」水色の表紙に蝶の羽をつけた子どもの姿が印刷されている。印刷譜を貼り付けた「モンペさん」以外は、7ページほどにすべて手書きで楽譜が書かれている。
- K : 手書きの印刷楽譜を綴じたものに青の表紙を付け、「子供の歌」と表紙に手書きしたもの
- L : 手書きで「歌」と書いた紐綴じのもので、遊戯の曲が主である。間にガリ版刷りの「唱歌遊戯」(石川県保育協会)も何部かはさんであるが、いつのものか、いつ挟まれたのかは不明。
- M : 挟み込みの楽譜(印刷譜)を黒表紙で綴じたもの。『コドモノクニ』の付録楽譜も挟まれている。
- N : 「おうた」とある手書き楽譜の印刷 表紙には蛙の絵と1932. 5. 28(昭和7)の日付がある。

以上、出典が確認できた楽譜類は大きく3つのグループに分けられる。

一つ目は東洋英和女学校で用いられていたテキスト類である。当時のカナダメソジスト系の幼稚園保姆の多くは東洋英和女学校師範科の卒業者であり、養成課程で用いられたテキストがそのまま実践の場で用いられていたのである。HとIである。二つ目は当時出版されていた楽曲などで、土川五郎のものを中心とした遊戯曲も含んでいる。A～Gまでが該当する。東洋英和女学校附属保姆養成所は大正8年に、上田保姆伝習所を引き継ぐ形で設置された。当時のリズムの教授者は土川五郎であり、律動や表情遊戯を教えていたので、そのことも影響しているであろう。^(註9) 三つ目は保姆達個人のノートで、J～Nがそうである。女学校師範科で学んでいた時のものや、保姆となつてから講習会などで知り得た楽譜を写したり綴じたりしたものである。秦みさを退職後に主任となつた田多野貞子の印が押された「Music Note」も残っており、そこには作詞・作曲者名も記した曲の

山 森 泉

写しのほか、創作（習作）と思われる曲の一部も残されている。このほか、時代が不明のものや曖昧なもの、手書きの五線譜ノートなどもある。年号がはっきりわかる資料の中には、『Music For Children Book 2』（Selected by the Toyo Eiwa Kindergarten Training School）もあり、昭和4年から7年まで保姆であった「秦みさを」の名が書かれている。秦は東洋英和女学校師範科を卒業しており、母校で使用したテキストを保育に用いていたことがわかる。

プログラムの歌の記載には、曲名ではなく歌い出しの歌詞が書かれたものや、遊戯やリズムと区別するための「うた」または「～のうた」と表記されたものがある。感謝祭の一部の⑪「大麦小麦」の正式曲名は「感謝祭」であり、証書授与式⑧「春を呼ばふよ」の正式曲名は「春」である。感謝祭のプログラムで昭和7年以外に記録されて残っているのは、9年、12年の2年分である。どの年も第一部の中で共通して歌われていたのが、この「大麦、小麦」の歌である。キリスト教保育に携わった人の中には慣れ親しんだ方も多と思われる。

楽譜 感謝祭・春／各1段目

春
-阿部末子-

大 中 寅 二 作 曲
昭和四年八月十五日

明るく・歯切よく

は る と ば ー よ み ん な で よ ば ー よ
は る と ば ー よ み ん な で よ ば ー よ

感謝祭
-阿部末子-

大 中 寅 二 作 曲
昭和四年八月十五日

嬉しく

大 ひ ゑ と ひ ぎ も よ ど ん も く り も こ や せ の り す も

同様に、感謝祭の一部⑤「ダリヤのうた」⑧「りんごのうた」の曲名はそれぞれ「ダリヤ」「りんご」である。感謝祭一部の②「お祈り 光や雨」は「光や雨や ～A Song of Thanks～」の題の歌で、歌詞は

- 1節：ひかりやあめや きれいなはなとり くださるてんの ちちをほめまつれよ
 - 2節：クルミヤリンゴヤ スベテノヨキモノト チチハハトラタマフ カミヲホメヨ
 - 3節：いとかわゆきは あいするエスさまと うれしきクリスマス ほめまつれよ アーメン
- となっている。

昭和7年度（昭和8年）3月の保育証書授与式のプログラムにある④「蝶々の町」は、絵雑誌『コドモノクニ』の昭和7年4月号所載「てふてふの町」であり、付録の楽譜が残っている（次ページ参照）。その年に新しく出たものも保育に取り入れ活用していたことが分かる。

『コドモノクニ』は、大正11年に創刊され、昭和19年に終刊するまで285冊が発行された月刊雑誌である。表紙も含めて30数ページと薄手の冊子であるが、童話、童謡、曲譜、曲に振付けられた舞踏などが毎号掲載されていて、児童文化史の上では「近代日本における〈幼児文化〉を確立させた」とものと評価されている。また土川五郎や島田豊によって振り付けされ、振りの動作が文字の説明だけではなく、絵入りで示されていることから、「幼稚園遊戯として幼児教育の場で効用を発揮

山 森 泉

したり、創作舞踊の活性化につながっていった」のであるが、雑誌という性質上、破損、消滅しているケースが多く、直接資料として残っているものは少ないようである(註10)。十四番幼稚園には何号分かの雑誌(年号が分かる最も古いものは昭和3年)と付録の曲が残されており、保姆たちが「てふてふの町」以外にもこの雑誌の歌や振り付けを活用していた跡が見える。

保育証書授与式の二部の②「まゝごと」⑦「チューリップ兵隊」は、資料中には見当たらないが、『童謡唱歌名曲全集』(昭和6年発刊)で確認したところでは、前者は濱田廣介作詞、草川信作曲、後者は北原白秋作詞、中山晋平作曲の歌であろうと思われる。ともに尋常小学校1・2年程度の唱歌と童謡を収めた第1巻所収歌である。

残されている楽譜類は、単行本のものもあれば、プリント印刷のもの、手書きで写したものなど多様である。「小さい子どもの歌遊びとリズム」とサブタイトルがついているマーガレット・アール・ペイン編の『あそびませう』(昭和6年発行)には、2代目の園長イ・エル・ベーツのイニシャル「E. L. B」が表紙裏に書いてある。また、『おさなごのうた』由木康作詞、津川圭一作曲(昭和10年発行)には曲名にしるしのついたものが数曲あり、保育に活用していたことがわかる。

『幼稚園記録』には昭和7年から13年までの7回の感謝祭の記録がある。(表2参照)

表2 感謝祭の折の『幼稚園記録』

年	参加者	内 容
昭和7	38名	二部を終って後育児院主事、松岡先生より育児院の状況についてお話を伺ふ。子供の家庭より献げられたる野菜、果物などは全部育児院へ当日午後寄贈。
昭和8	26名	お母様方に来席願ふ、育児院主事島田先生にお話を伺ふ。
昭和9	27名	終りに広坂教会白石牧師先生よりお母様方に感謝祭の意義につきお話をして頂く。
昭和10	22名	育児院主事島田先生にお話を伺ふ。献げし物は全部後来通り 全部育児院に贈る。
昭和11	19名	感謝祭、母の会、午前九時半より子供達より献げたる穀物、野菜等を飾り、後之を全部育児院に寄附せり。尚、その後で、広坂教会牧師高柳先生よりお話を伺ひたり。
昭和12	6名	十一月十二日(金)感謝祭を行ふ。献げたる野菜、穀物、果物は全部育児院へ贈呈す。出席のお母様僅かに六人なり。
昭和13	35名	園児よりの献物米、蔬菜果物全部育児院へ寄贈す。育児院主事松本先生来席子供達及お母様方へお話をなさる。

感謝祭には子どもたちとともに母の会員も出席して共に礼拝を守り、「金澤育児院」主事や牧師の話を聞き、持ち寄った果物、野菜などは礼拝後に育児院に贈っている。この育児院は現在社会福祉法人梅光会に引き継がれている(梅光児童園)が、日露戦争後にD. R. マッケンジー夫妻がカナダメソジストの社会福祉事業の一端として始めたもので、当時の地名は上鷹匠町であった。(註11)

『幼稚園記録』では昭和14年3月までしか記録をたどれないが、昭和14年度の『日本メソジスト教会年會記録』には、金沢育児院に関して、「松本清三兄就任以来、児童の教育の上にも経済的にも、経営、指導よろしきを得、内外の新任を得て、能く、其の使命を完ふしてゐる。院児三十八名。」との記載がある。(註12)

昭和初期の北陸地方キリスト教幼稚園教育(1)

3. キリスト教七幼稚園

この地区におけるキリスト教主義の幼稚園のつながりが記録に出てくるのは、昭和10年3月(日は不明)に丸越ホールにおいて開かれた市内基督教七幼稚園連合のひな祭りが最初である。(表3参照)

表3 基督教七幼稚園行事

年号	西暦	月日	行事名	参加園	備考
昭和7	1932		なし		
昭和8	1933		なし		
昭和9	1934		なし		
昭和10	1935	3月	ひな祭り	七幼稚園	丸越ホールにて
		10月4日	運動会	七幼稚園	主催は北陸女学校附属幼稚園 附属幼稚園創立50年
		10月24日	講演会		北陸幼稚園創立50(周)年の催しとしてキ ュックリッヒ先生を招いて開催。 母の会員も出席させて頂く。9名。
昭和11	1936	3月7日	ひな祭り	七幼稚園	主催丸越
		10月5日	運動会	七幼稚園	第二回、北陸女学校校庭にて。
昭和12	1937	2月27日	ひな祭り	七幼稚園	主催丸越
		5月21日	母の会	七幼稚園	保母大会の講演、北国新聞社ホール 自由学園主事佐藤瑞彦先生の講演
		9月13日	運動会		中止と決定
昭和13	1938		なし		
昭和14	1939		なし		
昭和15	1940		なし		
昭和16	1941		なし		
昭和17	1942	10月21日	運動会	六幼稚園	白衣の勇士ご招待
昭和18	1943	11月4日	母の会	六幼稚園	
昭和19	1944		なし		
昭和20	1945		なし		

※昭和14年以降に関しては、『日本メソジスト金澤部会記録』と十四番幼稚園母の会記録ノートによる。

昭和8年、昭和9年の記録には全く記されていないが、昭和11年3月7日、昭和12年2月27日にはいずれも丸越主催で市内基督教七幼稚園が参加したひな祭りの記録がある。

『幼稚園記録』によれば 昭和10年10月4日に、「北陸女学校附属幼稚園創立50周年(正しくは創立50年、傍点は筆者、以下同じ)に相当」ということで、附属幼稚園が運動会を主催したことが記されている。市内基督教六幼稚園も祝意を表してこの催しに参加した。六幼稚園とは、十四番幼稚園のほか、川上、広坂、野町、白銀、馬場各幼稚園である。この日は附属幼稚園に招かれる形で行われた模様で、プログラムは「別紙添付の如し」とあるが、『幼稚園記録』には残っていない。そのため詳細はわからないが、「楽しき一日を過ごしたり」との感想が添えられている。また、記念行事にふさわしく、参加した幼稚園児に対し北陸幼稚園より記念の品として「国旗、風船、キャラメル1個」が贈られた。運動会が開かれた場所は記されていないが、10月1日に808坪の運動場が北陸女学校に完成し、30日には運動場開きを行っていることから、新設の運動場で開催された

山 森 泉

可能性も考えられる。(註13)

この運動会は、基督教七幼稚園合同で初めて開催されたものである。翌年昭和11年10月5日には、「第二回市内基督教七幼稚園連合運動会」が北陸女学校校庭で開かれた。この年は参加園児への記念品として箱に入った旗のセットが贈られたが、費用は各幼稚園が負担した。

昭和10年は北陸女学校創立50周年の記念行事が盛大に開かれた年である。昭和10年11月(1935年)刊行の『北陸五十年史』にもこの行事が大きく取り上げられている。このときの式典には、金沢育児院主事島田胖も来賓として名前を連ねている。

北陸女学校創立50周年に合わせて北陸女学校附属幼稚園の「創立五十年記念式」が昭和10年10月24日に開かれた。来賓の一人として祝辞を述べた十四番幼稚園園長のオ・シー・リンゼーは、メソジスト幼稚園代表ということで「キリスト教主義の六つの幼稚園はこの幼稚園にとりまして妹の様なもの」(註14)と述べている。(幼稚園の記念式の中で、来賓の祝辞のいくつかは、「創立五十年」の式典であるにもかかわらず「五十周年」と述べているし、掲載写真なども同じ時のものに対し「五十周年」とするもの、「五十年」とするものなど、当時の参加者にもまた『北陸学院百年史』の記述にも混乱が見られる。) (註15)

北陸幼稚園五十年記念として行われた催しを通し、基督教保育のつながりが見えてくる。『幼稚園記録』によれば、10月24日には、「北陸幼稚園50(周)年」の記念としてキュックリヒ先生を迎えての講演会も行われ、十四番幼稚園からも母の会員9名の参加者がいたと記されている。

昭和11年は、基督教幼稚園渡来50年記念行事が全国各地で行われた年である。これは現存する北陸幼稚園の創立から起算しての記念行事ということであった。基督教保育聯盟の式典は同年6月5日に東洋英和女学校で開催されているが、保育聯盟の組織固めと拡大を図る意図もあったらしく、中央行事だけではなく、各部会でも祝賀会、記念講演会を開くようにとの呼びかけがあった。北陸部会では、金澤記念講演会を6月5日廣坂幼稚園で行い、大崎治部氏による講演会が開催された。(註16)しかし、この講演会に関しては講演対象者が幼稚園関係者だけで母の会員には案内がなかったのか、『幼稚園記録』には見当たらない。

昭和12年は日中戦争なども起こった大変な年になる。金沢にあった第九師団に動員令が出され、兵士たちは中国に出兵している。5月21日に自由学園主事佐藤瑞彦先生が保母大会のために金沢に来られ、それを機会として市内基督教七幼稚園聯合の母の会が開かれた。場所は北国夕刊新聞社ホールである。(J・K・Uの記録によれば、佐藤氏は昭和8年北陸部会の総会研修会の折にも来沢して「保育精神の根本的考察」と題する講演を行っている。場所は広坂幼稚園であった。) (註16)しかし、この年の運動会の開催は見送りとなった。9月13日(?日は定かではない)、市内基督教七幼稚園合同の秋季運動会開催について相談した結果、「時局柄中止」を決定している。日本メソジスト教会が「時局に対する宣言」を出したのは昭和12年7月22日、「時局に対する申し合わせ」は同年9月16日付けで出されている。翌年のひな祭りの記述もないのは、同様の事情から行われなかったためであろう。

この昭和12年の合同運動会中止以後、七幼稚園の合同行事は中断されたままとなり、昭和14年3

山 森 泉

また、関係する教会の資料で残されているものの中に、「日本メソジスト金澤教会 四季會記録」の昭和12年の「幼稚園報告」がある。そこには1月～6月の上半期に実施された家庭訪問回数、母の会出席者と平均出席者数が記録されている。このとき在園児64名の十四番幼稚園は111回の訪問を行い、6回行われた母の会の平均出席者は32名であった。同じく金澤（広坂）教会に属する広坂幼稚園は、28名の在園児で78回の訪問、母の会6回の平均出席者が14名と少なめであった。「商家が多いため、多忙にて母の会出席少数のため訪問回数を多くす」として、下半期には訪問が99回に増加している。このようにして、当時の保姆たちは家庭と連絡を密にすることに努めたのである。(註18)

「母の会」はどの園でも早い時期から組織されて活動をしていた。「子供に関わる対話を通して母親が子供により正しい理解をもつとともに、そのことを通して幼稚園の保育に関心をもってもらい、さらにはキリスト教信仰への理解を持つにいたってほしい」との願いからである。また、会の運営には母親たちの自主性が尊重されており、「幼稚園を子どもへの働きかけに限定しないで、母親の生き方や家庭のあり方の改革、再創造にまで拡大しようとしていた幼稚園への期待を、母の会の指導に熱を入れた婦人宣教師たちの中に見ることができる」のである。(註19)

J・K・Uの年次報告の中で、昭和6年にE.L.ヘンプステッドは、「両親教育と卒園生へのフォローアップ」と題して母の会の年間活動計画に関して具体的に6項目を挙げている。(註20) 同年、「両親教育」という題でM.W.ヘスターは、幼稚園において諸集會を原則月1回すると述べ、集會の内容に関して以下の項目を挙げている。(註21)

- ①毎年始めの会では、幼稚園の目的と意義および保育用品、年間計画、1日の保育家庭とその時間区分等について説明する。
- ②キリスト教についての講演。園の牧師または園外から講師を招いて宗教的な話をする。
- ③健康に関する講演。医師、歯科医師および小児栄養の専門家を招いて行う。
- ④両親の会にふさわしく、幼児のしつけなどに関する講演会。
- ⑤1月に、母親たちのためのお楽しみ会。
- ⑥園児たちの特別礼拝と発表会。収穫感謝やクリスマスなど、時宜に合わせて行う。
- ⑦卒園時の特別プログラム。

それらは十四番幼稚園でも例外ではない。『幼稚園記録』には体格検査があった後に、医師からその概評を聞いている。また親子遠足があり、「向山・夢香山（卯辰山）」「末の浄水場」「粟ヶ崎遊園」や「金石の涛々園」に出かけたことが何度か記されている。粟ヶ崎遊園はもともと海水浴場であった砂丘地に、大正14年に作られた一大レジャーランドである。大山すべり台などがある遊園の「子供の国」は子どもたちの人気を集めていたが、残念なことに昭和16年軍に没収されたという。涛々園は演劇場・水族館を備えていたが、やはり戦争のため休業を余儀なくされている。(註22)

母の会員がキリスト教について学ぶ機会は、広坂教会の牧師や、園長であり宣教師であるオ・シー・リンゼーのお話を聞くという形で行われていた。このほか、「日本メソジスト金澤教会 四季會記録」の昭和12年の「幼稚園報告」には、聖書研究会について「毎週木曜日にリンゼー先生指導のもとに母の会員の研究あり」と記されている。

また幼児に関する講演会にも積極的に取り組んでおり、保育聯盟の北陸部会が研修会を開いた折の講師に話を聞くこともあった。昭和7年の北陸部会は野町幼稚園で開かれ、聯盟顧問の高崎能樹が「潔き性情の養成」の題で講演している。十四番幼稚園では9月20日に母の会として「東京阿佐ヶ谷幼稚園長高崎能樹先生の来沢を機としお話を伺」っている。出席者は41名。「詳細は母の会記録」とあるものの現存していないため実際の内容は不明であるが、よほど興味深い内容であったのだろうか、同じ年の感謝祭出席者は38名、クリスマス出席者が39名であることから見れば、母親達の熱心さが分かる。(あるいは園からの強い勧めがあったのであろうか。)昭和10年2月11日には川上幼稚園・広坂幼稚園と合同の母の会を川上幼稚園で開き、平澤恭子京都相愛幼稚園園長の話聞いている。この時は会場が他の園であったためか、紀元節(祝日)で子どもが家にいたからか、参加者は18名であった。平澤恭子は聯盟の副会長として昭和9年5月に開かれた北陸部会でも「情操教育」と題する講演を行っている。

ヘスターが記した集会の内容⑤に関しては、母の会で新年会に福引をしたことも記されている。昭和9年1月23日の記録はこうである。

「午前九時半よりお母様方を迎えてお誕生日会并に新年親睦会を行ふ。お赤飯のお晝食を共にす。尚福引もなす。」

一年前の昭和8年の1月には誕生会の折に母の会をかねて行った。三越(当時武蔵が辻にあった百貨店)^(註23)よりお赤飯を取り寄せたことや、母親には鶯餅も出されたことも記してある。

ところがこのように和気藹々としていた母の会の活動も、先述したように昭和12年の合同運動会が中止になっただけではなく、「北支事変のため家族中に応召される方或は兵士宿舎に当りなど実に多忙の秋により、中止とす。」とある。同年10月には、母の会で広坂教会高柳牧師に、「銃後における婦人の修養について」の話聞いている。

昭和12年11月の感謝祭には母親の出席は6人であった。これについて、「お母様方の出席僅かに六人なり。」と記されている。(表2参照) これまでの記述の中には参加者の人数について一切コメントをしていない田多野がこのような感想を書き入れていたことは、よほど悲痛な思いがあったからに違いない。

昭和13年1月の母の会は、既に優雅に新年会を楽しむ雰囲気ではなく、綑帯巻きをして陸軍病院に献納したと記されている。出席者は12名。昭和8年は34名、昭和9年が21名であるから、内容と共に参加者数からも時局の変化が見て取れる。

「母の会」ノートは昭和17年以前の記録が残っていないため、『幼稚園記録』との照合ができないが、行事の都度『幼稚園記録』には、「詳細は母の会記録にあり」と述べられており、「母の会」と行事とのつながりがあったことがわかる。

父親の集会について昭和6年の年次報告の中で、ヘンプステッドは、実施している園はあまり多くなく、参加者数からいえば、成功しているとはいえないが、出席した父親は強い関心を示しているため、継続して父親の集会をもつことは意義があると述べている。^(註24)

十四番幼稚園では、昭和9年に第一回父の会が開かれた。(表4参照)

山 森 泉

表4 父の会

年	日	人数	内 容
昭和9	十一月日亡失	12名	夜父の会を開き、初めての試みなり、村上先生に司会お話を願ふ
昭和10	十一月亡失	8名	午後七時半より当園に於て第二回父の会開催。広坂教会牧師高柳先生にお話を願ふ。
昭和11	十一月十九日 日？(ママ)	8名	第三回父の会開催。村上賢三先生にお話を願ふ。

わざわざ「夜」と記しているのは、日中父親が仕事をしていることに配慮したことを示すものであろうか。また「初めての試み」であることも記している。当時園医を務めていた村上賢三（後、北陸学院短大栄養科初代科長）にお話だけでなく司会も頼んだのは、同性である点を考慮したためであろうか。参加した父親たちは12名だった。以後、昭和10・11年に各1回開かれたが、開催した日時について「日を忘れた」と記している。ほとんどの行事の日時が記されている『記録』の中で、「初めての試み」と言いながら日にちが曖昧なのはなぜだろうか。主任保母であった田多野が直接関わらず、リンゼー園長や宣教師たちが関わっていたからであろうか。

「日本メソジスト金澤教会 四季會記録」にある「幼稚園報告」の「七、幼稚園ト家庭」の項目には、(イ) 家庭訪問回数 (ロ) 母ノ会回数及び出席者平均数 (ハ) 父ノ会回数及び出席数 (ニ) その他、がある。母の会は「出席者平均数」を求めているのに対し、父の会は「出席数」であることから、ヘンプステッドが述べているように、現実に照らし合わせて当初から父の会の複数回開催を期待していなかったと考えられる。「日本メソジスト金澤教会 四季會記録」の昭和12年1月から6月までのことを記した記録の中には、広坂幼稚園が1回父の会を開いたことが記録されており、「出席者は3人。村上先生によって勵まざる」となっている。村上先生とは、十四番幼稚園同様、園医を務めていた村上賢三氏である。内容も開催月も不明であり、昭和11年度（1月～3月まで）に開かれたのか、4月以降なのかは分からない。以後の「四季會記録」の該当箇所には「ナシ」の記載のみである。(註25)

結局、十四番館幼稚園の父の会は3回のみで途絶えてしまい、以後の記録には出てこない。それは、すでに述べてきた行事記録や基督教七幼稚園合同行事と同様、昭和12年以降は国が戦時体制に入ったからということが大きな原因と考えられよう。3回しか開かれなかった父の会であるが、どのような話題が提供され、どのような方向に発展させようと思図していたのか、今後他の園の「父の会」資料などからの検討をしていきたい。

5. 終わりに

これまで見てきたように、幼稚園の様々な行事や活動は時代の影響を受けて縮小せざるを得なかったもの、やむなく中止となったものもあった。特に宣教師たちの活動は戦時下にあって大きな制約を受けたのであるが、そのような中であっても、幼稚園に携わる伝道活動が熱心に行われていたことが昭和14年の『日本メソジスト教会年會記録』からも窺える。

北陸部報告の六、幼稚園の項 (報告者は部長松本以策、富山教会牧師) (下線筆者)

幼稚園： 其數二十一、保姆、役員數百名、園児數九百三十名(昨年より五十七名増)、(中略) 事變下にありて、何れも園児を増加し、母の會の幼稚園に對する援助、行軍慰問事業に對する活動は、頗る活撥であつた。而して、母の會は、教會と、社會との圓滑なる接面として、北陸部にあつては、最も、重大、有力なる存在である。又五十名の保姆はさらに教會員として、日曜學校教師として、常に、聖戰の第一線に活躍して、其使命を果して居らるゝは、當部の大なる強みである。(註24)

この記述にあるように、母の會・保姆たちの熱心な働きが当時の幼児教育を支えていたのである。その後、時局の変化による宣教師の本国帰還に伴い、ミッションの經營してきた幼稚園はメソジスト教会の所属となり、牧師中心の理事組織に移管していったのである。

以上、『幼稚園記録』を中心に園内の行事と、七幼稚園の合同行事、父母との連携に項目を絞って考察してきた。次稿では他の資料との照合や確認を進めながら、項目を広げて別の観点から保育の姿を掘り起こしていきたいと考えている。

付記：この研究を進めるに際し、本学児玉衣子教授より助言をいただいたことを記し、感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

- 註1：学校法人清泉幼稚園『創立65周年記念誌 清泉(十四番)幼稚園の歩み』1991
- 註2：現在、高橋昭代園長の依頼を受けて元職員南野裕子(旧姓平野)さんが、資料の種類別にリストを作成したところである。
- 註3：後藤田遊子「D. R. マッケンジーと金沢英学院」『北陸学院短期大学紀要』第30号1998
- 註4：小林恵子『日本の幼児保育につくした宣教師 上巻』キリスト新聞社 2003
- 註5：梅染信夫「英和幼稚園を創った婦人宣教師」『北陸学院短期大学紀要』第35号 2003
- 註6：児玉衣子「石川県のキリスト教保育を担った人々(1)」『北陸学院短期大学紀要』第34号2002
児玉衣子「北陸地方のキリスト教保育史—JKU年報から(2)—」『北陸学院短期大学紀要』第35号2003
- 註7：キリスト教保育連盟百年史編纂委員会『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟 1986 p.151
- 註8：秋川陽一・永田桂輔・狐塚和江・溝手恵里 「倉敷市幼稚園百年史研究 倉敷幼稚園における唱歌教育の変遷—大正から昭和初期にかけて—、倉敷幼稚園における家庭との連携—大正から昭和初期を中心に—(倉敷市立短期大学平成七年度紀要) などでも、資料保存とその活用を研究にまとめ以後、継続されている。

山 森 泉

- 註9：東洋英和女学院百年史編纂実行委員会『東洋英和女学院百年史』学校法人 東洋英和女学院
1984 p. 220
- 註10：中村悦子・岩崎真理子『『コドモノクニ』総目次上・下』日本文化史叢書12 久山社 1996
pp. 10-13 p. 15
- 註11：倉長 巍編『加奈陀メソジスト日本伝道概史』 加奈陀合同教会宣教師館 1937には、「明治38年7月1日創立、日露戦役傷病兵士等軍人家族の遺族に限り生活難の者を収容するを以てカナダ伝道会社経営の下にデー・アール・マケンヂー（マ）博士夫妻の創立にかかり大正11年理事組織となし〜」（p. 214）とある。（このほか p. 169, p. 189参照）
なお、2003年に近代日本キリスト教名著選集 14（日本図書センター）として復刻されている。
- 註12：日本メソジスト教会『日本メソジスト教会年會記録』第参拾貳回 1939年 p. 174
- 註13：北陸五十年史編纂委員会編『北陸五十年史』北陸女学校 1936 p. 405
- 註14：北陸五十年史編纂委員会編『北陸五十年史』北陸女学校 1936 p. 247, p. 255
- 註15：北陸学院100年史編集委員会編『北陸学院百年史』1990 p. 300
- 註16：キリスト教保育連盟百年史編纂委員会『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟
1986 pp. 245-249
- 註17：文部省『幼稚園教育百年史』昭和54年 pp. 251-256
- 註18：金沢長町教会所蔵「日本メソジスト金澤教会 四季會記録」
- 註19：キリスト教保育連盟百年史編纂委員会『日本キリスト教保育百年史』キリスト教保育連盟
1986 p. 156
- 註20：キリスト教保育連盟『JKU ANNUAL REPORT OF THE JAPAN KINDERGARTEN UNION』
7巻 日本らいぶらり p. 347
- 註21：同上 p. 351
- 註22：「激動の地方紙」制作委員会『激動の地方紙』北陸放送株式会社 1992
田中善男監修『写真と地図で見る金沢のいまむかし』図書刊行会 1991
- 註23：田中善男監修『写真と地図で見る金沢のいまむかし』図書刊行会 1991
- 註24：キリスト教保育連盟『JKU ANNUAL REPORT OF THE JAPAN KINDERGARTEN UNION』
7巻 日本らいぶらり p. 349
- 註25：金沢長町教会所蔵「日本メソジスト金澤教会 四季會記録」
なお、村上賢三は当時衛生医であり、また無教会派のクリスチャンであった。金沢大学医学部退職後、本学栄養科（現、食物栄養学科）の初代科長を務めた。
- 註26：日本メソジスト教会『日本メソジスト教会年會記録』第参拾貳回 1939年 p. 174